

75. 「佐目馬」・「駿馬」・「毛馬」

問 「肯山公治家記録」に、馬の献進のことが書かれていますが、その中の「佐目馬」、「駿馬」、「毛馬」とは、どんな馬ですか。また、どう読めばよいのですか。

答 「肯山公治家記録」後編巻之96の中の、元禄12年〔1699〕閏9月14日の記事に、次のようなところがあります。⁽¹⁾

『十四日己酉〔つちのととり〕

松平淡路守殿へ、大堀正助使者トシテ、先達⁽²⁾佐目馬駿馬ノ中所望セラルニ依テ、佐目馬贈遣、駿馬ハ宜〔よろし〕カラスト雖モ、一覽ノ為兩匹牽セ遣サル、且取次へ正助談スルハ、公御不勝手ニ就テ贈答断ラレ、近年親戚方へモ馬ハ送ラレス、乍然〔しかしながら〕毛馬御所望ノ儀、且御懇意ト云ヒ贈遣ノ由ヲ述フ、兩匹ノ中留ラルヘキ所意ニ称〔かな〕フニ因テ兩匹トモニ受取ラル由直ニ返答セラル。』

上文の中にありますような御質疑の3点は次の通りです。

1. 佐目馬

「さめうま」と読みます。

白毛の馬。また、両眼の縁の白い馬、或いは虹彩の白い馬のことです。

2. 駿馬

「ぶちうま」と読み、また「はくば」と音読みにすることもあります。「駿」の音は「はく」。『和漢三才図会』（寺島良安）にも『駿 音博〔はく〕布知〔ぶち〕』とあります。

⁽³⁾毛色がまだらの馬。種々の毛色が入りまじっている馬のことです。

3. 毛馬

「もうば」と読みます。

馬の毛色のひとしいものをそろえること。また、毛色のひとしい馬をもいいます。

注(1) p.65の注(2)参照。

注(2) p.115の注(5)参照。

注(3) わかんさんさいずえ。p.551 注(7)参照。

資料 古語大辞典（中田祝夫編）

日本国語大辞典（小学館）

大漢和辞典（諸橋轍次）
和漢三才図会（寺島良安）
広文庫第3冊（物集高見）

76. 「対物宮城の穴」とは

問 「仙台市史」第1巻の568ページと569ページの2個所に「対物宮城の穴」とありますが、これはどのようなものですか。

答 「仙台市史」第1巻のその箇所には、次のように記されています。

『「雪^モキ度物 旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名」「遺憾ナ物 田封(田村)旧郡岩手ニ附ス 七日王城寺西原開拓地ニ占ラル」「毀ツテ惜キ物 青葉本丸ノ建物 大年寺」「捨テラヌ物 佐久間洞巖⁽¹⁾ 観跡聞老志 虎岩道説仙台人物志」という明治十五年「対物宮城の穴⁽²⁾」の対は、明治前期における仙台の人士の痛恨の念と旧藩に対する懐古の情とを象徴している。この思いは、昭和の初年まで、仙台の思想と文化とを支配する一つの大きな流となった。……「対物宮城の穴⁽³⁾」が「鎮台ノ号砲」と並べて「耳馴レタ物」として……』ところが、上記文の「対物宮城の穴⁽⁴⁾」には注記番号が付いており、その注記の部に『山本晃「番附類」（仙台郷土研究一ノ一一）』と出所が示してあるのです。

そこで「仙台郷土研究」第1巻第11号の「番附類」（山本晃）の本文に当たりますと、それには「対物宮城の最⁽³⁾〔もつとも〕」とあり、また、「わしが国さ」第39号（仙台協賛会）の「仙台郷土文献展覧会」の記事中にも「対物宮城の最⁽⁴⁾」が載っており、「仙台市史」の方の「対物宮城の穴」は2箇所とも誤りであります。この番付は、明治15年7月に出たもので、同類の事物のうち、最⁽³⁾も〇〇なものの2物を144組対置配列したものであります。ですから、この番付を読み取る場合は、「最⁽³⁾も雪⁽³⁾キ度物旧藩戊辰ノ失敗 一山百文ノ汚名」、「最⁽³⁾も遺憾ナ者田封(村)旧郡岩手ニ附ス 七日王城寺西原開拓ニ占ラル」とするわけです。

注(1) p.195の注(9)参照。

注(2) とらいわどうせつ。儒医。名は玄乙、字は忍性、幼名卯之松、後に道説と改め、老いて塞馬と号した。寛文3年〔1663〕4代伊達綱村の侍医となる、時に年37、道説学を好み、書をよくして名を挙げた。「仙台人物志」「燈前新話」等の著あり、享保10年〔1725〕11月歿、享年98、仙台北八番丁江巖寺に葬る。

注(3) もと相撲の番付から出て、芝居をはじめ長者・金持・学者・医者・書家・画家・戯作〔げさく〕者・武芸者から美人番付に及び、商売にも茶屋・菓子屋・料理屋その他、商品の酒・醬